「任命制」の研究　―スターリン主義組織論の本質

掛川徹　2020.8

(1) ロシア共産党の変質

党人事における「任命制」。ロシア共産党がこの制度を党組織に導入したことが、スターリン主義の重要な結節点となった。日本ではこの問題についての論究されたことはほとんどなかった。本稿では、任命制導入の経緯についてさらに検討するとともに、その背景にあるロシア革命と内戦の性格を検討し、ロシア革命とドイツ革命の密接な関係について考察する。

「任命制」の展開

スターリンの人事政策が彼の権力システムの重要な構成要素だったことは、部分的にはこれまでも指摘されてきた。党幹部の責任意識が蒸発し、官僚主義が蔓延した組織システムの組織論上の源泉は、人事と財政を上級権者に一元化したこの「任命制度」にあることはまちがいない。

しかし、これまで「任命制」という組織概念が独立してとりあげられた機会はきわめて少ない。なぜ「任命制度」が台頭し、これにたいしてロシア共産党がほとんど抵抗らしい抵抗もできずにスターリン権力体制の成立を許したのか、詳しく検討してみよう。

もともとロシア共産党に書記局や書記長という役職はなく、全員が対等な中央委員会による集団討議で 10 月武装蜂起をはじめとする重要事項を決定していた。

しかし、対立事案を中央委員会が多数決で議決したのはドイツ軍とのブレスト・リトフスク講和受諾を決めた１９１８年第 7 回党大会が最後である。その後は内戦という緊急事態に対応して党の中央集権化が進み、レーニンとスヴェルドルフがその都度の重要事案を個別に討議、決定する状態が続いた。

スヴェルドルフがスペイン風邪で死亡したことから、１９１９年第８回党大会では、中央委員会の機能を強化する目的で中央委員のなかから政治局（政策決定をおこなう)、組織局（党の組織活動全体を指導する)、書記局を選抜する。初代書記局員はクレスチンスキー、プレオブラジェンスキー、セレブリャコフで、彼らは後に全員解任される。組織局はまもなく書記局の幹部会にすぎなくなり、政治局と書記局が党中央権力を運営することになった。

「分派活動の禁止」へ

書記局の役割は当初はっきりしておらず、政治局が重要な政策決定をすべて行っていたため、書記長が重要な職務だとは思われていなかった。１９１７年当時２万人だった党員はやがて 60 万まで膨れ上がり、内戦が山場を越すとともに国内の矛盾が党内のあつれきとして反映されるようになる。経営単独責任制をめぐる労働組合の不満、地方組織と中央組織の対立、労働者組織と農民組織の敵対など、党内の摩擦と緊張が深まるなかで、党内の不満を調整し、規律を回復するという、当初想定していなかった任務を書記局が引き受けることになった。しかし、書記局の下に党内問題を処理する党統制委員会はつくったものの、当初これはほとんど機能しなかったという。

１９２０年秋に登場し、シリャプニコフとコロンタイが指導する「労働者反対派」は、経済的政治的中央統制の強化に反対し、党のすべてのポストを公開選挙することや党内での討論の自由、労働組合の独立性と経済制度における労組の至上権を主張したが、統率力や綱領において党内反対派グループとしてはこれがもっとも重要だった。「労働者反対派」とこれに反対するトロツキーとの「労働組合論争」が激しく争われた。

しかし、「労働組合論争」を受け、クロンシュタット反乱と平行して開かれた１９２１年の第 10 回党大会で、レーニンは「党内での討論や論争という奢侈」を否定し、「われわれには反対派はいらない、いまは、そんなときではないのだ！」と叫んだ。大会決議は「あらゆる分派活動の完全な撲滅」を指令し、党員を除名する権限を大会から中央委員会に移譲する秘密条項「第７項」を採択して幕を閉じた。

書記局の拡大

この 10 回大会は政治局と組織局をそれぞれ７人に増員すると同時に、旧書記局を一掃してモロトフ、ヤロスラフスキー、ミハイロフを新たに任命した。党の規律回復という面で書記局がまったく機能しなかったための人事一新だったらしい。この人事の背後にスターリンの陰謀があったのではないか、とカーは示唆するが、事実は不明である。

組織問題のあつれきが増えるにしたがい、書記局スタッフは増員された。１９１９年５月に 30 人のスタッフで始まった書記局は、１９２０年３月第９回大会で１５０人、１９２１年第 10 回大会で６０２人となり、他に１４０人の陸軍分遣隊が存在した。

理論的には党内のポストは選挙で選ばれると考えられていたが、実際にはすでに１９２０年４月の段階で、反抗的だとみなされたウクライナ支部中央委員会がモスクワの中央委員会の指示によって転任させられている。１９２０年９月の党協議会は「例外的な場合には選挙されるべき職務への指名の不可欠なこと」を確認した。

各党委員会の書記を任命するのか選挙するのかは論争となったが、１９２１年３月の 10 回大会では、書記人事は県委員会の自由であるものの、書記局の推薦を要するという微妙な表現で、人事権の重心移動が表現されている。１９２２年３月の 11 回党大会は書記職について「より上級の党当局によって確認」されるべきことを決議した。

粛清と統制の強化

増大した党員の「放蕩、堕落、窃盗、その他無責任な行為についての恐るべき諸事実」（中央委ノーギン）は一貫して問題となっていたが、１９２１年にレーニンの旗振りで始められた粛清キャンペーンは党統制委員会の管轄下で党員の 24%を除名した。これによって利権目当ての投機分子が党から放逐されたことも事実だが、同時に、ソヴィエト内の無制限の出版の自由を要求したミヤスニコフ、ネップ反対派のモスクワ「討論クラブ」、コミンテルンに「労働者反対派」の主張を訴えた「二二人宣言」グループなども除名された。

１９２２年の第 11 回党大会以降、統制はますます強まった。大会でコシオールは「もしだれかが党建設あるいはソヴィエト建設の領域でのあれこれの欠点を厚かましくも批判したり指摘したりし、またそうすることを必要と考えたならば、彼は直ちに反対派に数えられ、これが直ちに所轄当局に通報され、彼は取り除かれた」と反対派を「粛清」する動きに抗議した。

しかしレーニンはネップの「退却」を軍事作戦にたとえ、「かかる瞬間にあっては、最も些細な規律違反をも、厳格に、苛烈に、無慈悲に罰することが必要欠くべからざることである」と大会で宣言した。大会決議は「随所で党活動を完全に麻痺させている徒党とグループ」を非難し、中央委員会が「しりごみすることなく党からの除名を以て闘うよう」勧告した。

この第 11 回大会直後に開催された中央委員会でスターリンが書記長に、書記局員としてモロトフ、クイビシェフが選出された。当時この人事が注目を引くことはなかったが、労働組合論争を通じてトロツキーの台頭を当時もっとも警戒していたレーニンは、これとバランスをとるためスターリン抜擢に積極的に同意したと言われる（B・スヴァーリン、R・サーヴィス)。

ゲーペーウー

11 回大会は党統制委員会による党員の点検・粛清を、一過性のキャンペーンではなく継続的に行うよう指示する規約を採択した。これにもとづき、党統制委員会と司法当局、ゲーペーウー（国家保安局）との連絡体制が確立された。党外の敵を対象としたチェカ（全ロシア非常委員会）と異なり、ゲーペーウーはもっぱら党内反対派をターゲットにしていた。ソヴィエト民主主義が形骸化し、ボリシェビキ一党体制が確立してしまうと、民衆の不満は党内問題という形でしか反映されず、「党外の敵」はいまや「党内反対派」という形でしか表れないため、党内組織問題が治安問題として扱われたのである。こうして党員の案件が司法やゲーペーウーに持ち込まれると直ちに党統制委員会が処理に当たる体制がつくられた。

１９２０年以来、党書記の一人が担当してきた「調査配給局」（ウチラスプレッド）が、党統制委員会と並んでその影響力を拡大していった。この部局は内戦下で党の人材を評価し、「党員の動員、移動、任命」を管理していた。内戦が終わると、調査配給局は縮小されるのではなく、逆にその管轄を国民経済の管理運営へと広げていき、第 10 回大会に提出さ

れた報告では、1年間で4万２６００人の党員の移動と任命を行っている。たとえば食糧武装徴発隊では各農家の割当量を計算するために読み書きと分数計算が必須だったし、停滞する鉄道、鉱山の技術に通じた人格は、識字率が低い当時のロシアではきわめて貴重で、その任命は中央の専権事項とされたのである。当時は役職者をすげ替えるのではなく「大衆動員」が主で、誰を任命するのかは州や県の各地方委員会に任されていた。しかし、専門化された任命がますます重要だという口実の下に調査配給局の権限は「拡張」され、これが政治、経済の両面で国家の各機関に党が及ぼす統制の、目立たないがしかし強力な中心点となった。

こうした党員人事の操作システムがスターリンの傘下に組み込まれたのと並行して、国家行政機構の人事システムもまたスターリンの手中に転がり込んだ。

内乱、内戦が続いたことで、参加者が１０００人を越えるソヴィエト大会の開催は3カ月に1回から年1回に延期され、大会が選んだ３００人の中央執行委員会でも緊急事態の連続に対応できず、立法上、行政上の「非常措置」が人民委員会議によって決定された。本来の主権団体たるソヴィエト大会はどんどん形骸化・名目化していった。

中央集権化に伴う行政機構の腐敗や官僚主義化を是正するために、もともとあった会計検査院を改変して労農監察部がつくられた。もともとはここに労働者農民を登用することで、権力の乱用を防ぐのがレーニンの構想だったが、最終的に労農監察部は党中央統制委員会の権力に併合・一体化されてしまい、逆に党統制委員会がソヴィエト行政のあらゆる活動部面でこれを監督する手段として労農監察部が使われるはめになった。

こうして不適格党員の除名を担当する「党統制委員会」、メンバーの特質を把握してこれを適所に任命するウチラスプレッド＝「調査配給局」、党内警察機構ゲーペーウー、国家行政機構の人事を担当する労農監察部、これら諸機構がスターリンの書記長就任に伴い、一体となって独自運動を始めることになる。事態の圧力にしたがって進行した権力の集中過程を、スターリンは統合し、利用し、私物化していったのである。

(2) スターリンへの権力の集中

「任命制」を成文化

１９２３年1月末の中央委員会で、スターリンは『機能分化についての書記局提案』という覚書を提案、これによって書記局は「県レベルより高くない」あらゆる党職―県党委員会の書記以下のあらゆる党職の任命権を与えられることになった。それより上級の党職の任命は組織局に提出され、組織局決定人事には政治局が異議を唱えることができるとされた。さまざまな制約がつきまとっているとはいえ、スターリンはここで、必要な党員配置の調整を地方組織に指示する従来の任命制から一転し、地方組織の幹部団を私的利害にもとづい

て全面的にすげ替えるスターリン体制としての任命制を成文化したのである。

その後、ウチラスプレッド（「調査配給局」）は 24 年にオルグラスプレッドへと編制替えとなったが、これらの組織が任命した党人事の数は次のようなものだった。（表）

この表からも、スターリン書記長就任以降の人事が「責任ある職員」すなわち幹部層の任命に重心を移していることが見てとれる。「組織局は党の活動家を選抜し、配置する … 県、州、地方の党組織の書記や主要役員をそうする … そのことがやがて党大会での多数票をスターリンに保障するし、そのことが権力獲得のための主要な条件であるからだ」（バジャーノフ『スターリンの元秘書の回想』）。

スターリンが管理するリスト（「ノメンクラトゥーラ」）にもとづいて党の役職を割り振るこの制度は、30 年代になると党内人事にとどまらず全ソヴィエトの人事政策で適用され、任命された特権幹部層が「ノメンクラトゥーラ」と呼ばれるようになる。

レーニン「最後の闘争」

ちなみにレーニンは、22 年 4 月にスターリンが書記長に就任してほぼ 2 ヶ月後の 5 月末に最初の発作で倒れ、「活動に戻るとすぐに … 弟子たちが独裁を濫用し、相手かまわず行使」する現実、党員の「無責任かつ権威主義的な官僚への堕落」に驚き、これが「レーニン最後の闘争」の契機となった（スヴァーリン『スターリン』）。

しかし、中央統制委員会に労働者出身メンバーを増やして官僚主義を制御するという彼の勧告は、逆にスターリンの任命人事を増やしてスターリン一派を強化しただけに終わった。そもそも１９２１年の段階で、党役職のすべてを公開選挙に付すよう要求した「労働者反対派」の除名を要求したのはレーニンその人だった。「任命制」はスターリンが登場する以前の段階ですでに自己運動化しつつあり、レーニンもその土俵の上で「任命制の公正な運用」を求めたにすぎなかったのである。

党組織が下から選出した役員をスターリンが上から任命した私兵集団で置き換えていく過程が一挙に進行したことで、ロシア党内で「任命制」がはじめて焦点化した。機関組織の幹部がまるごと入れ替えられる、という在り方は、従来の「任命制」にその萌芽的な面があったとはいえ、その規模において明らかに従来の「任命制」から異質な転換を遂げつつあった。これが第 12 回党大会では党内闘争の重大な焦点となった。23 年 4 月の時点では地方委員会書記の 3 分の 1 が上から任命されたメンバーだったので、単純に代議員構成だけを考えれば、第 12 回党大会までは大会多数決でスターリン派を解任できる可能性が存在した。

しかし、党内民主主義をもっとも強く主張していた「労働者反対派」は第 12 回大会までに主要メンバーがすでに除名されていた。彼らは会場で無記名の「パンフレットを配布しただけだった。個別に反対派メンバーが「任命制」の乱用を弾劾したが、スターリン・ジノヴィエフ・カーメネフの 3 頭目（「トロイカ」）が支配する大会のすう勢を変えることはできなかった。12 回大会は結局「任命制」を追認し、「中央および地方の党の審査配置機関を拡大する措置をとるように指令する」ことを決議、むしろ逆に任命制強化の方向を確認した。

大会の確認にもとづき、１９２３年7月中央委では、ウチラスプレッドが任命すべき国家・経済機関のポスト３５００、ウチラスプレッドに届け出が必要なポスト１５００のリストを決定するとともに、「地方機関の活動家の任命および解任についての中央委員会と各部門党組織および各地方党組織とのあいだの協定の形態にかんする規則がウチラスプレッドにより作成された」。23 年 11 月党中央委員会決議もこれを追認し、経済機関、農村、赤軍の各ポストへの任命が最も重要であることを確認している。

遅かったトロツキーの決起

大会後も粛々と人事の入れ替えが進んだ。12 回大会で沈黙を守ったトロツキーも、遅ればせながら 1923 年 10 月に「任命制」批判の口火を切った。「戦時共産主義のもっとも過酷な日々にあってさえ党内での任命制は現在の 10 分の 1 の規模でもおこなわれていなかった。地方の委員会の書記を任命する習慣は現在では常習となっている。…反対や批判や抗議が起こると書記は中央の助けをかりてその反対者を容易に配置がえすることができる。…上から下へと組織された書記機構は〝すべての糸をみずからの手の中に〟集めつつあり、そのやり方はますます恣意的になっていく」「党機構の官僚主義化は書記の選抜の方法の適用を通じて前代未聞の大きさに達した」（トロツキーの中央委員会宛 10 月 8 日付書簡）。

その直後に公表された「四六人声明」は「上から任命された職業的党職員と共同生活に参加しない党員大衆とのあいだに」生じつつある党の分裂を指摘、「党の書記ヒエラルヒーがますます大きな程度で協議会や大会のメンバーを補充し、それらがますます大きな程度でこのヒエラルヒーの執行会議となりつつある」といって官僚独裁を批判した。しかし、トロツキーが決起した時はすでに地方組織幹部の多数派がスターリン派で、大会多数決をとる展望はほとんどなくなっていた。スターリン派は、黙々と人事のすげかえを遂行して多数派を確保した後に「反トロツキー」キャンペーンを開始した。

「白が黒に見える」

「それが党にとって必要、もしくは重要であるなら、われわれはこれまで何年も抱いてきた思想を意志の力によって 24 時間以内に自分の頭から消し去ることができるでしょう …たとえ自分が見たものは白だったと思っても、いまだに白に見えるような気がしても、それを黒と思います。なぜなら、私にとって党以外の生活、あるいは党の見解と一致しない生活はありえないからです」（ピャタコフ、1928 年）。白が黒に見えるという、「任命制」組織人のメンタリティをあますところなく表現した一文である。

「反トロツキー」キャンペーンが始まって以降、ロシア共産党ではこういう代議員が反対派に罵声や怒号を浴びせるだけで、理性的な党内議論はもはや成立しなくなった。党内反対派を粛清し、任命制権力が肥大化する一方的な過程がその後に続いた。

農民にたいする戦争

こうして「任命制」導入にいたる経緯、これをスターリンが個人独裁体制の道具としていった過程を概括すると、ソヴィエト民主主義が形骸化し、住民の大多数を占める農民の意志が「プロレタリア独裁」下の赤色テロルでねじふせられていく当時のロシアで、党内の民主制度は空論でしかなかった、という問題に突き当たる。

さまざまな研究が今日あらためて焦点をあてているが、ロシアの革命権力は、ロシア国内という限定した範囲でみれば、限られた食糧と資源を農民から収奪する一方の、農民を犠牲にしてかろうじて成り立つ少数派都市住民による独裁権力体制、という側面を否定しようがない。

近代総力戦争の重みに耐えられずロシア帝政は軍隊の瓦解を決定的な要因として崩壊したが、これを引き継いだボリシェビキ政権も社会システムを再構築できないまま、ロシア社会の解体状況は内戦を通じて劇的に悪化した。旧体制の復興をもくろむ旧地主勢力とソヴィエト政権の闘いを一方の軸としながら、もう一方ではわずかな食糧をめぐって農村と都市が生死をかけて奪い合う「飢餓の革命」が展開した。農民家族が餓死するのもかまわず穀物を略奪する労働者の武装徴発隊にたいして農民が村ごと反乱を起こし、赤軍、白軍、緑軍（農民反乱軍）三つ巴の壮絶なテロの応酬が続いた。14 年当時の人口１億７０００万（８割が農民、都市労働者はわずか３００万）のうち、第１次大戦に１１００万が動員されて３００万が戦死。飢饉による死者も含め、続く内戦で一説によれば１０００万人がさらに死亡したと言われる。半分以下に激減した都市住民は、工場から盗んだ物資を闇市場で穀物と交換して食いつないだ。先細る一方の食糧と資材すべてを赤軍に集中することでボリシェビキはかろうじて白軍との戦争に勝利したが、後には経済も人心も荒廃しきったロシアが残された。

【参考文献】

Ｅ・Ｈ・カー『ボリシェビキ革命』第１巻（みすず書房、１９６７年)、『同』第２巻（１９６７年)、『同』第３巻（１９７11年)、『一国社会主義　政治』(みすず書房、１９８７年)、『一国社会主義　経済』(１９７７年)
ボリス・スヴァーリン『スターリン　ボリシェビキ党概史』上下巻（教育社、１９８９年）
藤井一行訳『トロツキー新路線』(柘植書房、１９８７年)

文中の「任命制」に関するデータはほとんどカーの上記著作によっている。すでに 50 年も前からスターリンの組織体制についてこれだけ詳細な内容が紹介されていた事実は、自らを振り返ってもショックだった。新旧左翼いずれもが、ロシア革命をモデルとしながらロシア革命そのものに向き合わず、スターリンやレーニンの権威を鵜呑みにしていた事実が刻印されていると思えたからである。

(3) 対農民戦争としてのロシア革命

大規模テロの行使

レーニンは内戦のあいだ、「われわれは極限的戦争状態にあるのだ。われわれは反革命派にたいし、全力をふりしぼって大規模テロルを行使しなければならない」といった内容の電報をひっきりなしに各方面に打電した。これを受けて凄惨（せいさん）な情景がロシア全土で繰り広げられた。

「［イルクーツクで］すべての家は略奪され、家畜は持ち去られ、いくつかの家族は皆殺しにされ、… 道端や村で『見せしめ』のために見分けがつかないほど傷つけられた農民の死体が放置され、これらの死体を片付けたり埋葬したりすることは厳禁された … 元市長、助役、治安判事、… 多数の活動家や商人の死体があった。政治部（チェー・カー）の中庭で … 1カ月以上毎日昼夜を問わず銃声が鳴り響いた。… 主教の死体は駅に向かう途中の広場に長いあいだ野晒しにされた」（メリグリーノフ『ソヴィエト・ロシアにおける赤色テロル』）。村の子供から老人まで赤軍の人質とされ、「富農」や「上中流階級」は無差別に拷問、虐待、殺害の対象となった。村民が「匪賊（ひぞく）」の居場所を明らかにするまで、目の前で人質が次々に銃殺された。エスエルやメンシェビキなどロシアからの亡命者が報告したショッキングなその内容は決してデマ宣伝ではなかった。

レーニンは自分がしていることを完全に自覚していた。「独特な『戦時共産主義』とは、農民から余剰全部を、また、ときとしては余剰どころか農民にとって必要な食糧の一部分までも、事実上とりあげたこと、軍隊と労働者の給養の費用をまかなうためにとりあげたことである。…荒廃した小農民的な国では、そうするほかに地主と資本家に勝利することはできなかった」（『全集』第4版32巻）。

レーニンの無慈悲さ

旧ツァーリ帝国の版図全域で血の川が流れたが、その中心にいたのはまぎれもなくレーニンで、スターリンは端役の一人にすぎなかった。むろん、レーニンからスターリン主義が自動的に派生したとは言えないが、革命権力を維持するためなら農民あるいは労働者の犠牲を辞さないレーニンの無慈悲さ、苛烈さをもっとも忠実に学んだのがスターリンであり、後の農業強制集団化にいたるロジックが「戦時共産主義」に内在した点を見れば、レーニンがスターリン体制の道を開いたことも今日では否定できない事実である。旧ソ連軍将校ヴォルコゴーノフは、「こんなことを書くのはつらい。…私は元スターリン主義者で、悩みぬいたあげくにボリシェビキの全体主義を全面的に否定するようになった。その私にとって、レーニン主義は、私の心の中で陥落すべき最後の砦であった」と書いたが、日本で「レーニン主義」を標榜した組織の一員として、その慨嘆は誰しも理解できるのではないだろうか。

革命は滅びるかもしれない、という緊迫した情勢でスターリンが党書記長に就任した。

「われわれはこんなもののために戦ったのではない」という労働者党員の不満は、食糧不足への抗議ストに参加した労働者も、飢餓状態で食糧倉庫を襲った農民も、のきなみ「反革命」として銃殺される状況下では、まともにとりあげるべくもなかった。

クロンシュタットの反乱

１９２１年３月に勃発した有名な「クロンシュタットの反乱」は、このようなボリシェビキの容赦ない赤色テロルと“対農民戦争”を背景に、起こるべくして起こった大規模な不服従事件だったのである。仮にこうした状況で労働者民主主義を実践すれば、たちまち党内は大混乱に陥り、人口の過半を占める、農民反乱の洪水のなかでボリシェビキ権力は解体してしまう―このリアルな危機感こそ、21 年第 10 回党大会が討論抜きで「分派禁止」を決定した背景であり、23 年第 12 回大会がスターリンの恣意的な人事政策を容認した背景なのである。

「任命制」というスターリン主義組織論の本質に触れるや否や、かつてジノヴィエフとカーメネフが、「ボリシェビキは農村では少数派」で、ボリシェビキ単独政権を政治的テロで維持することを恐れて 10 月蜂起に反対した、そのリアリティーに立ち戻らざるを得ないのである。社会主義を実行する条件がない農業国家ロシアで、テロも辞さずに「プロレタリア独裁」を宣言したレーニンとボリシェビキの試みそのものが果たして正しかったのか、という次元の問題すら考えさせられる現実である。

内戦は必然ではなかった

ロイ・メドヴェージェフ『10 月革命』（１９９８年）は、ロシア革命が不可避だったことは事実だが、テロと内戦が不可避だったわけではない点を指摘する。同書によれば、憲法制定議会選挙の実施を 1 年延期して名簿を新しいものにつくりかえれば、ボリシェビキと左派エスエルが議会多数派を得て安定した国内統治基盤ができたはずだという。

また、食糧の強制徴発を決めた 18 年 5 月の「食糧独裁令」ではなく、現物累進税と余剰穀物の自由取引―エスエルが要求し、その後ネップで採用した政策内容を当初から認めていれば、農民は農業経営に集中したはずだという。もしこれらが実現していれば、「憲法制定議会」という錦の御旗を白衛軍に渡すこともなく、農民が白衛軍を支持することもなく、ソヴィエト政権はテロ体制を必要とせず、その後の内戦で膨大な犠牲を払う必要もなかったというのである。それなりにリアルな当時の選択肢であり、レーニンもそういう選択があること自体は当時認識していたらしい。

しかし、こういう政策は、当時の常識からすれば「社会主義」とは見なされなかっただろうし、エスエルが多数を握る権力はレーニンが意図した「プロレタリア独裁」でもない。内戦回避よりドイツ革命と「社会主義建設」がボリシェビキの政策判断で優先された点は中野徹三『社会主義像の転回』（１９９５年）も指摘する。

合同反対派の限界

〝対農民戦争〟というロシア革命の性格は合同反対派にも色濃くその影を落としている。フィッシャーも触れているが、反対派が党内闘争を自己規制し、絶えずボス交的に問題を処理しようとした最大の理由は、ソヴィエト政権と農民の利害が対立し、党内闘争が内戦の引き金を引くかもしれないという恐怖であった。

27～28 年の穀物危機を契機にスターリンは一転して性急な工業化政策に転じ、農民経済の穏健な発展を望むブハーリン右派と対立した。この時、トロツキーでさえも、農民の不満を背景にして反ソヴィエト軍事独裁が樹立されるのではないかと恐れ、スターリン支持を一時とはいえ提言している（ロイ・メドヴェージェフ『歴史の審判に向けて』２０１７年)。27 年に除名された合同反対派は、そのほとんどが「スターリンの左旋回」を支持して自己批判・復党した。モスクワ裁判で殺されるまで彼らもまたスターリン賛歌を歌ったが、その間工業化の原資を得るために穀物が輸出され、５００万とも８００万とも言われる農村住民が飢死した。「農民、農家経営、農業は反対派の視野と関心に入っていなかった」（最高国民経済会議に在籍し、後に亡命したＮ・ヴァレンチノフ。前掲書)。

合同反対派とスターリンの間には農民との関係が緊張すれば消えてなくなる程の対立しかなかった、という現実は重い。メドヴェージェフが 27 年合同反対派の闘いをささいなつまらないエピソードとして描くのもこのためである。旧反対派が銃殺されたことも、農民や知識人にリンチ、テロ、迫害を加えてきた報いだと冷たく突き放す意見が旧ソ連国内には根強くある（ソルジェニーツィンなど)。

反対派にまともな対案がなく、ロシア革命そのものがドグマだった、という点はマーティン・メイリア『ソヴィエトの悲劇』（１９９７年）も強調する。ボリシェビキがテロと内戦、粛清の道を突き進んだのは現実の要請というよりイデオロギー的な要請にもとづくとして、ボリシェビキの暴走をもたらした根源はそもそもマルクス主義のイデオロギーが間違っているからだ、という詳細な分析をメイリアは行っている。マルクス存命時に想定できなかった事態の展開をマルクスの責任にするわけにはいかないと思うが、ボリシェビキの「社会主義」認識の中身を問いなおす必要があることは事実だ。

梶川伸一『飢餓の革命』（名古屋大学出版会、１９９７年）他、梶川三部作は一時話題になったが、当時の雰囲気を生々しく伝える、秘密書庫の膨大なデータをただ羅列しただけである。ロシア革命で農村がどういう位置にあったのかというロジックや全体像は、公開資料のみに依拠したカーの方が正確につかんでいる。梶川本は、農民に何の利益ももたらさなかったレーニンとロシア革命に意味があるのか、と新旧左翼の教条的姿勢を糾弾した以外、カーの分析に付け加えるほどの論点は特に示していないように思う。

▽ドイツ＝ロシア革命の視点

「戦時共産主義」から農業強制集団化、大テロルにいたる、ロシア革命の凄惨な現実をロシア一国の枠でみれば、レーニン悪玉論、当時のロシアで社会主義を構想したのがそもそもの間違いという絶望的な結論にしかならないが、事態はそれほど単純ではない。レーニンは「社会主義への移行を実現する決意」は述べたが、ロシアに社会主義的秩序は存在しないと18 年 5 月段階で断定しており、その困難をはじめから知っていたとしか思えないからである。

革命権力の赤色テロル体制も、はじめから意図していたという訳でもない。17 年 10 月の軍事クーデターの際、武装解除した軍官学校の生徒や士官たちは「労農権力に今後二度と抵抗しない」旨宣誓しただけでそのまま解放されている。後に人質を皆殺しにする残虐さに比べ、ロシア革命もはじめのうちは実に牧歌的だったのである。

残虐な政治テロルの恒常化は、憲法制定議会を解散し、食糧独裁令を実行したことで生じた摩擦と対立にたいして、条件反射的にテロ体制を固定化していった面が大きい。だから、なおのこと、利害がそもそも単純には一致するべくもない農民国家で労働者階級が独裁権力を握るという決断そのものが問われるのである。

(4) ロシア革命をドイツ＝ロシア革命として再評価する

もともとロシア革命のモデルはフランス大革命で、「ツァーリ専制打倒のブルジョア革命をロシアでやる」というのがロシア社会民主党の共通認識だった。自由主義ブルジョアジーの役割を重視するメンシェビキに反対し、「ロシアのブルジョアジーは臆病なのでプロレタリアートが革命の先頭に立つしかない」というのがボリシェビキ派の立場だったのである。レーニンの 17 年「4 月テーゼ」はこういう認識を覆し、ロシア革命の性格を事実上社会主義革命と規定したことで衝撃をもって迎えられた。その理論的根拠が『帝国主義論』である。

ロシア農民の苦難の原因は大土地所有と結びついた銀行資本にあるという認識で、レーニンにとってロシアの「後進性」はドイツの「先進性」とワンセット、2 つで 1 つの「世界システム」だったのである。10 月蜂起をめぐる白熱したボリシェビキの会議でレーニンは繰り返しドイツ情勢をとりあげ、「国際情勢は武装蜂起を日程に上らせている」「リープクネヒトの勝利はわれわれがおかすであろう一連の愚行を帳消しにしてくれる」と論じた。

ドイツ革命への期待

ロシアの社会主義は農村の社会化抜きにありえず、農村の社会化にはトラクターが必要で、トラクターはドイツ革命がなければ入手できない―こういう状況でボリシェビキは農民が餓死することもいとわず、権力を維持するだけのために農村から暴力的な食糧徴発を続けた。その確信犯的な在り方は、ロシア国内だけに限定してこれを考えると、「大殺人者」

「人類全体を裏切った男」「キリストの敵」「赤い独裁者」（当時レーニンは海外でそう呼ばれた）にしかならない。実際、チェカや食糧徴発部隊の非人道的な政策を担当した職員のなかからは、かなり大勢の精神病者が出たとも言われる。

今日振り返るなら、理想集団であり、それなりに合理的集団だったボリシェビキがこうした「逸脱」をかろうじて容認しえたのは、ドイツ革命が起きるまで手段を選ばず権力を維持すれば、本来の理想主義的な在り方に立ち戻ることが可能だと信じていた、という以外に考えられないが、フィッシャーもこの点を裏書きしている。木製の鋤を使う文字の読めない農民が１億５０００万もいるロシアで、トラクターを生産する能力をまだ持たないわずか３００万の都市労働者が社会主義権力を宣言するという決断は、ドイツ革命を前提しなければとうてい理解できないのである。

レーニンとローザ

実はこういうレーニンの認識はローザ・ルクセンブルクも共有していた。彼女は、ロシア革命の困難が「ロシアの未成熟ということではなく、…ドイツ・プロレタリアートの未成熟」にあるという立場から、「身をもって世界プロレタリアートの先頭に立った」ボリシェビキの「不朽の歴史的功績」を讃える一方、「レーニンは方法論を完全に間違っている」という予言的な批判を行っている（ローザ・ルクセンブルク「ロシア革命論」）。

ボリシェビキは「無賠償無併合の講和」を宣伝すれば三ヶ月でヨーロッパ革命が起きると信じており、トロツキーのカレンダー修正も「ドイツ革命には数年かかる」という程度だった。だからこそドイツ革命が十年単位で遅れるとわかった時に彼らが受けた衝撃は深刻で、ここからロシアの歪んだ現実を合理化する「一国社会主義」論も登場した。

真の悲劇は、レーニンがここまでドイツ革命に依拠する一方、スパルタクス団を指導するローザは「戦争を内乱へ」という革命戦略を否定していた点にある。敗戦で帝政は吹き飛んだものの、国防軍や生産組織など資本主義社会の頑強な骨格が崩れなかったドイツ革命のその後の展開は、ローザの正しさをある面で示していた。レーニンとローザの非和解的対立はロシアとドイツの現実に深く根ざしていたが、両者の溝が埋まることはとうとうなかった。

第４回コミンテルン大会

フィッシャーが描く 22 年 11 月第４回コミンテルン大会の情景は示唆的である。ロシア内戦の論理がコミンテルンに波及し、「反ボリシェビキ」のドイツ党左派を粛清するよう求められた時、レーニン自らきっぱりと「レーニン主義」を否定してドイツ党左派を擁護し、参加者を驚かせたのである。ドイツ革命の異なる要素を統合しようとしたレーニンは、ロシアと違ってドイツ党には強権的な手法をいっさい求めなかった。あまりにロシア的なやり方をコミンテルンに持ち込んだのは間違いで、「われわれが自分で今後の成功への道を断っ

てしまったという印象を受けた」と述懐した彼は、ロシア革命の経験がドイツで役に立たないことを理解していたように思えるが、権力維持が自己目的化する革命ロシアの現実を制御できないまま病に倒れた。

毛沢東、チャウシェスク、ポルポト、金正恩―ロシア革命後の国際共産主義運動を一瞥すれば、「レーニン主義」の決算がマイナスであることは確かである。しかしロシアを軸にとるかドイツを軸にとるかでその結論は 180 度違ってくる。レーニン革命論の核にあるドイツ革命を一方の基軸にすえてそのプラスマイナスを決算することが必要なのである。ロシア革命勝利の方程式が肝心のドイツ革命を絞殺するというレーニン革命論の内的ロジックこそ今日究明されるべきテーマではないだろうか。

歴史の「もし」を語るなら、27 年に合同反対派が蜂起してスターリン主義官僚を一斉逮捕し、ドイツ党左派を基準点にコミンテルンとロシア党を民主的に再編できたなら、工業ドイツと農業ロシアが国境を超えて結合し、豊かな民主的社会主義が実現する可能性は確かにあったのだ、という気がしてならない。そういう客観条件を活かすことができなかった当時の思想的・運動的・組織的な枠組みを再検討すべきだと思うし、その内容こそ現代のわれわれが社会主義に至る道を照らすと思うのである。（おわり）

【補遺】

ドイツ革命の難題

当時ドイツで問われた最大のテーマは、マルクスが想定したようなブルジョアジーとプロレタリアの階級的二極化が実現せず、従来構想された革命論が通用しなかったことである。

ドイツ労働組合総連合の中心的な層は、金属や炭鉱などの下層労働者に比べれば「貴族的なほど」の高給取りで年金や医療保険も保証されていた。当時ベルンシュタインが唱えた修正主義―革命ではなく永続的な改良を―は、社民党役員とその支持基盤の本音を正直に表明したにすぎず、カウツキーら幹部層が「修正主義」に反対したのは、資本家への恫喝と取引に役立つ「革命」理論を建前だけでも掲げておく必要があったからにすぎない。社民党員で労組幹部の一人イグナツ・アウワーはベルンシュタインに「お前の言うことは全部正しい。がしかし正しいことだからと云ってそれを全部口に出してしまってはならないのだ」と書き送った（河合前掲書）。社民党の変質は、指導者が資本に買収されたからというだけではなく、労働者全体の生活の変化を反映していた。ロベルト・ミヘルス『政党の社会学』（1911 年、邦訳 1973 年）はドイツ社民党の実態を詳述し、1911 年トリポリ戦争に反対するゼネストが兵器廠労働組合の猛反対で頓挫したり、メーデーすらこれを「祝って休める」人々と「深刻な生活難」のために働かざるを得ない人々が対立した事実を伝えている。当時の業種間格差も大きく、1892 年の党員集会でヴィルヘルム・リープクネヒトが「ザクセン地方の鉱山労働者、シュレージェンの職工は、あなた方のとっている給料を、大富豪の収入とみるでありましょう」と語ったほどである。

労働者階級の分裂

ドイツ労兵評議会第 1 回大会の評決が示したように、ドイツ労働者の主流はドイツ皇帝退位とワイマール共和国に満足し、それ以上の変革を望まなかった。彼らがはっきりと第 2 革命を志向したのは１９２３年のインフレーションで老後の年金生活が吹き飛んだ時だけである。その革命的機運もインフレ収拾策が導入された 23 年 8 月には霧散し、ドイツでいつ武装蜂起を実行すべきかモスクワが盛り上がっていた 23 年 10 月の時点で社民党支持層の生活は元に戻っていた。年金支給で老後生活を保証してくれる社会システムを打倒したいと思う人はいないのである。

労働者は放っておいたら労働組合的改良しか望まないので革命的理論を外部から注入しなくてはならない、というレーニンの理論も、その土台となる認識はベルンシュタインと同じで、労働者が「脱プロレタリア化」した事実を前提にしている。レーニン革命論は、あるがままの労働者は革命を望まないという根底的不信感をベースにしていたと言える。

しかし、他方では失うものをもたない本来の「プロレタリア」たるドイツの金属労働者や炭鉱労働者はロシア革命型の徹底的な変革を望み、モスクワの支援を受ける彼らの孤立した武装決起は社民党員で構成された警察部隊や国防軍の弾圧によってことごとく粉砕された。彼らはその後社民党と袂を分かってドイツ共産党を構成し、自分たちの要望を体現した民主主義的な組織を手探りしたが、スターリンが導入した「任命制」によって粛清・再編されてしまう。

ローザの死

ドイツ革命の課題と困難性を知悉するローザは、深い憂慮を抱いてリープクネヒトと革命的オプロイテの孤立と暴走をいさめたが、自らの意思ではない 19 年 1 月闘争に巻き込まれる形で国防軍に殺されてしまう。亡くなる直前、「周囲の人々にも、彼女が心中苦しんでいることが感じられた。彼女は言葉少なくなり、うちとけぬようになった」「毎日、強烈な脱力感の発作に襲われ」、「政策を矛盾なく一貫してたてていくことは、すでに彼女にはできなくなっていた」という（P・フレーリッヒ『ローザ・ルクセンブルクの生涯』)。ドイツ労働者階級の分裂そのものを体現した彼女の姿に胸が痛むが、フレーリッヒの報告を読むと、彼女の死はある種の必然性を帯びていたように思える。